

2. 酪農地域における課題解決型総合指導の実施

大分家畜保健衛生所 2) 畜産技術室 3) 畜産振興課
○寺山将平 大森麻里子 手島久智
病鑑 磯村美乃里 病鑑 森学 波津久航²⁾ 安達恭子³⁾

【はじめに】現在の酪農家は経営安定のための規模拡大への対応、泌乳能力重視の改良、食の安全・安心と多様なニーズに応えることが求められている。そのため当家畜保健衛生所（以下、家保）では高品質な生乳の確保、防除可能な事故の低減、繁殖成績の向上の3点を目指して指導を行っており、一定の改善が見られたので報告する。

【材料および方法】対象はA～Eの酪農家5戸。以下（1）～（3）の各検査を実施。

（1）農場A～Cで月1回のバルク乳検査を実施し、細菌スコアおよび乳房炎起因菌の検出について指導。[平成28年4月から平成29年9月まで合計37検体]（2）農場A、Dでは周産期において一般および代謝系項目について血液検査を実施。[平成28年4月から平成29年9月まで合計24回222検体]（3）農場A、B、C、Eの4戸に対して繁殖検診を実施。平成26年から平成29年9月まで月1回ずつ。乳検加入2戸では検診結果を反映してJMR（受胎確認遅延の指標）が算定されるため、数値目標をもって能動的な繁殖管理を目指すよう指導。治療が必要な個体を見つけた場合は、臨床獣医師と連携。

【結果および考察】（1）乳質低下につながるSAをモニタリングした結果、A～C全戸でSA感染個体を特定して別搾りによる対応を指導した。（2）①農場Aでは周産期血液検査により、乾乳牛についてHt、Alb、BUN、t-choの低下を確認し飼料メニューの改善を指導。また細菌スコアが6まで悪化した際には関係機関と連携して搾乳立会を合計2回実施。この結果を受けて飼養管理および搾乳衛生について指導。②農場Dでは未病個体について評価した結果、泌乳量増加に伴う肝機能低下からの回復が遅延する傾向を確認し、乾乳期のDMI（乾物摂取量）の低下について指導。また治療が必要な牛を発見して周産期疾病についての積極治療を行った結果、第四胃変位手術の件数が減少し、経済損失の抑制（共済点数の限度超過額の減少）につながった。（3）繁殖性については平成24年から平成28年のJMRの比較において、農場の繁殖管理によって明確な差が出た。発情発見に時間が割けないためと、ホルモン治療を多用する農場CでJMRは、35から60に悪化していた。一方で、発情観察について熱心であり、自ら人工授精を行って、繁殖検診の所見とすり合わせて考えてる農場EにおいてのJMRは、59から30まで改善が見られた。特に発情観察の頻度については自ら改善できるため、農家自身の基本的な取組みが重要であると再認識させられた。

【まとめ】家保は3検査を主軸に、酪農家の抱える問題に応じた支援を行っている。正確な結果の迅速な通知に合わせて、関係機関と連携して各農家の実情に即した指導を行うことが重要である。今後とも現行の指導を継続し、主体性のある酪農家を育成することで問題は解決していけると考える。